

## あとがきにかえて—高木修と小林正人の作品—

今年の新世代展は高木修、小林正人の新作個展です。いずれもその作品に接し、強い印象を受けたことが今回の展覧会の実現の契機となりました。二人の作家を組み合わせることそのものには特に意味はなく、また、新世代という名称にもあまり深い意味はなくて、当画廊が新たに紹介したい作家の展覧会という程の意味にとっていただければ幸いです。

私が高木修の作品に初めて接したのは、たかだか3年程前のことにすぎません。いまや高木修の仕事はモダニズム/ポスト・モダニズムの観点から云々されるような位置にいるのかもしれませんが、それはさておき、彼の作品はなんといっても安易に彫刻と呼べないところにユニークさがあります。素材は鉄でも、彫ったり削ったり盛りあげたりすることなく、ただ切ったり曲げたり組み合わせるだけの作品は、彫刻と呼ぶには誰しもためらいを感じずはらずで、やむなく立体と言ってみたり、あるいはインスタレーション(installation:直訳は設置)と呼んでみたりするでしょう。しかし様々な呼称にもかかわらず、彼の仕事を際立たせているのは、その空間性によってなのです。彼の作品は建築の要素、庭園の要素、家具の要素、オブジェの要素、そしてもちろん彫刻の要素などをともなっていますが、そうしたさまざまな要素をくっつけているのが「身体性」というものなのです。彼の作品は人の目の高さによってその高さが決められています(今回の作品は140cm)。人は自分の視線を動かし、体を動かししていくなかで作品と関係を持ちます。もともとそこに存在するのではなく、自らの身体を用いることによって発生する場。あるいは見る者みずからが一方の極となり、その対極として作品があり両者によって磁場が生じてゆく空間。それを発生させるべくあらかじめ仕掛けられた一定の回路。こうしたことは、いわゆる彫刻作品とはずいぶん異質なものです。高木修の作品を前にして「たまたま」という言葉を思い浮かべますが、そこには常に眼に見えない運動がともなっています。高木修は70年代半ば頃、画廊で従来のように作品を発表する一方で、自らの体を使い、しかも服を着たまま多摩川に身を挺して流れを止

めるなど、いくつかのパフォーマンスを行っていたこともあります。しかし、それすらも今の仕事と比べて基本的にはそうかけ離れていないのではないかと思います。変わったとすれば、それは作品に対する作者の距離であり、自分の体を開くかわりに、見る側の体を開かせていくことに力点が移ってきたということなのだと思います。

もう一人の小林正人の作品を見たのは去年の個展においてであり、それは彼の画廊での初めての展覧会でもありました。そのときの作品はいずれも100号以上の大きさのあるもので、不思議な力強さに眼を見張りました。彼の作品は絵画そのものが本来持っている力を回復させたい、という意志によって成立しているように思えます。彼は、人間の営みとしての美術の歴史をさかのぼり、絵画の原型を求めて深く掘りすすんでゆきます。手垢にまみれた「芸術」とか「Art」とかいうものをもう一度人間の原初の行為として洗い出すこと、あるいは本質的であろうとすること。しかもあくまで描くという行為の中で、画布に定着させることによってそれを貫こうとする態度。なおかつひたすら禁欲的であること。それを簡単に「古い」と片づけるのは見当違いというものでしょう。どうしてそうなのかということは本江さんの寄せて下さった素晴らしいテキストをお読みになって下さい。ともあれ小林正人の作品を前にしては、誰しも巷にあふれる身振りばかりの遊戯を忘れてしまうことができるのです。

最後に、高木さん、小林さんならびにお忙しいなか原稿を書いて下さった本江さんをはじめ、この展覧会およびカタログの実現に手をさしのべて下さった方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

1986年4月 佐谷画廊  
佐谷周吾